

だよ」とジャンプした。

真菜ちゃんは、私のいとこ。今年の四月に四歳になったばかりだ。

「拓海くんは？」

「お兄ちゃんは『けやき』でチョコバナナパフェ食べてる。わたし、ユナちゃん呼びにきたんだよ。ね、ユナちゃんも一緒にパフェ食べよう」

「うん。行こう、行こう」

やったあ！ おじいちゃん特製のチョコバナナパフェ。

拓海くんと真菜ちゃんが来ると、いつも作ってくれるのだ。

真菜ちゃんと一緒に『けやき』へ行くと、カウンター席でお客さんにまざって拓海くんがパフェを食べていた。

「よっ！ ユナ、久しぶりい」

「よっ！ 拓海くん。元気そうだね」

私のことを呼び捨てするちよつとナマイキな拓海くんは小学三年生だ。

「ユナと真菜の分もすぐに作るからな。座ってちよつと待つてろー」

調理場からおじいちゃんの声が聞こえてきた。

午後三時過ぎの『けやき』には、ティータイム中のお客さんも何組か来ている。メニューを確認。今日のケーキセツトはベリー味のヨーグルトケーキ。

「おーい、ユナ」

奥のボックス席から手まねきしているのは拓海くんと真菜ちゃんのパパ。つまり、私のおじさんだ。

席に行くと、おじさんとおばさんがアイスコーヒーを飲んでいた。

「こんにちは」

私がかっこと頭を下げると、二人ともにこつとする。

「この前会ったのが正月だから半年ぶりか。大きくなるのが早いなあ」

おじさんが言うと、おばさんはこにこしながらうなずいた。

「ユナちゃんくらいの年の女の子はあつという間に成長するもの」

そう言って、おばさんはアイスコーヒーを飲んだ。ストローを持つ細い指、カールさせた肩くらいの髪に水色のロングワンピース。おばさんって、いつ会っても優雅だ。おばさんの周りには目には見えないバラの花が咲いているような……そう、私のお母さんとは正反対の……。そんなことを考えていた時だった。

「ちよつと、父さん、あたしの自転車のカギどこー？」

早くしないとバイト遅刻しちゃう」

ドタバタとさわがしい音をたてながら、お母さんが『けやき』に入ってきた。

「え、拓海、いつのまに來てたの？」